

面白き 事もない世を 面白く



いとうなるたか
伊藤徳宇
くわな 桑名市長(三重県)

楽しくなければテレビじゃない

2000年4月1日の入社式。私は女優の江角マキコさんと一緒に、お台場のフジテレビにいました。当時フジテレビといえば、最も輝いている旬のタレントさんが新入社員の激励に入社式に駆けつけてくれるのが恒例でした。私の同期は梅津弥英子アナウンサーなど29人。一つ上の先輩社員として、冬季五輪金メダリストの里谷多英さんも人事部付で在籍していました。「なんか派手なところに来ちゃったな」というのが第一印象です。

私が最初に配属されたのは営業でした。当時はフジテレビが視聴率三冠王という黄金時代。広告代理店の方々と毎夜懇親を図る日々でした。コンプライアンスに対する概念が現在とは全く異なる時代の話です。で、詳細な記述は控えたいと思います。

4年目からは、スカパーのチャンネル編成と番組企画を担当しました。YouTubeもまだない時代です。有料チャンネル



はじめて制作した番組 DVD

として、どんな番組を編成すれば視聴者がわざわざ課金してまで見てくれるのか。テレビ局としても新たな



帯に自分の名前が入り、感激

なチャレンジでした。F1全戦生中継や海外のロックフェス生中継など魅力的なコンテンツを放映したり、韓流ドラマ12時間一挙放送など、当時としては斬新な編成を仕掛けたりと、とてもやりがいがありました。自分で番組を企画し、プロデュースもしました。「みんなの鉄道」「プラモつくろう」など、その道のマニアが喜んでくれそうな番組をいくつも立ち上げました。プロデューサーを引き継いだ「ゲームセンターCX」はDVDが何十万本も売れ、ヒットの一翼を担うこともできました。「楽しくなければテレビじゃない」。仕事楽しくて楽しくて、それこそ寝ないで働くことが許された時代。モニターを通して見える世界は、キラキラと輝いて見えました。

しかし一方で、帰省するたびに、桑名駅前がどんどん寂れていくのを感じていました。「リアルな世界を輝かせたい」。そんな思いが、自分の中でむくむくと大きくなっていきました。



ブラジル・サルバドールにて太鼓の達人と

2006年1月、私は妻と二人でバックパックを背負い、世界一周旅行に出掛けました。もう少し正確に記述すると、「東京から桑名まで、地球を反対周りに3万9600kmのUターン」です。フジテレビを辞め、地元である桑名市に戻って政治家を目指したい。漠然と妻を説得するために考え抜いた、渾身の企画でした。「うん、なかなか面白そうね」。妻の了解を得て、私の政治家への一歩は、まさかの海外へと踏み出すことになりました。財源確保も重要です。当時リクルート社が発行していた海外旅行情報誌『エイビーロード』に企画を売り込み、ウェブマガジンに旅先からの旅行記事をリアルタイムで掲載することで、収入を得ながら旅することになりました。

黄熱病や狂犬病などの予防接種を打ち、成田からまずはニュージーランドへ。旅が

世界一周の政治家



ウォーカブルな
独・フライブルクの街並み



サルバドル・カーニ
バル中の1コマ



サルバドルのカーニバル。昼間は安全

旅も終盤、アジアの屋台で食べるお粥やナシゴレンに、ホッとする自分に気づきました。成田を出発してから108日目。中部国際空港（セントレア）を経由して桑名市に到着し、翌日から私の政治活動が始まりました。

その後訪問したヨーロッパでは、洗練された街並みやデザインに感激しつつ、環境先進都市ドイツ・フライブルクでは、飛び込みで訪ねた環境コーディネーターが桑名市出身だと分かり、そのご縁に驚きました。アフリカでは、砂漠やサバンナなどの大自然に圧倒されると同時に、ケニアの劣悪な環境のスラム街で目をキラキラさせながら学ぶ子どもたちと交流し、「よりよい社会とは何なのか」を考える良い機会となりました。

しやすいオセアニアから、イースター島などをアイランドホッピングして南米に上陸。南米では、価値観をひっくり返されるような出来事ばかりでした。橋がなくても川を渡るバス、頻繁な停電、路上の空き缶を奪い合う子どもたち、それでもおらかなラテン気質の人々。ブラジル・サルバドルには、カーニバルの前後に3週間滞在しました。まちが日常から非日常へあつという間に一変し、歓喜の渦に巻き込まれる体験は忘れることができません。



ケニアのスラム内にあるマゴソスクールにて

位にランクイン。ハワイでの表彰式に招待していただいたのは良い思い出です。そんな生命保険業界に別れを告げ、2010年11月の桑名市議会議員選挙にカムバック当选すると、当時の市長周辺で不祥事が頻発する事態となりました。

「思い立ったら即行動」が私の真骨頂。2008年11月の桑名市長選挙に出馬するも、現職に敗れ、浪人の身となりました。落選中、次の選挙までどうやって食いつなごうか思案していたところ、プルデンシャル生命からスカウトを受け、そこから生命保険を販売する日々が始まりました。完全歩合制の給料体系の中、死に物狂いで営業した結果、飛ぶように保険が売れ、社内上位にランクイン。ハワイでの表彰式に招待していただいたのは良い思い出です。そんな生命保険業界に別れを告げ、2010年11月の桑名市議会議員選挙にカムバック当选すると、当時の市長周辺で不祥事が頻発する事態となりました。

政治と全く無関係な家庭で育ったので、いわゆる「地盤・看板・かばん」がありません。故につじ立ちや駅立ちを繰り返す以外に道はありませんでしたが、そのかいあって、2006年11月の桑名市議会議員選挙に当選することができました。無事政治家になることができたものの、市議会議員として、自分の理想と現実のギャップに悩む日々が続きます。そして出た結論が「自分が市長となり、まちをプロデュースしよう」でした。

6年で4回！実は選挙好き？



ハワイで開催された表彰式で喜ぶ筆者（右から二番目）

た。そして再挑戦した2012年11月の桑名市長選挙で現職に勝ち、初当選を果たしました。6年で4度も選挙に挑戦し、ようやくスタートラインにたどりついたのです。以来4期13年、市長を務め今に至ります。このコラムの執筆依頼をいただき、あらためて道のりを振り返ると、「若気の至り」や「無謀」と感じられるような挑戦的な決断の連続でした。それでも、挑戦し続けることで、自分の道を自分の手で切り開いてきたことは、私にとって大きな自信につながっていると感じます。好きな言葉は「面白き事もなき世を面白く」。世の中がどうなるかではなく、自分がどう面白くするか。その覚悟を持って、これからも突き進んでいきたいと思っています。